

◎野木京子

はちみつ色の放課後を  
瓶詰めにしてあるから  
ひとつ持って帰るといいよ

春町 美月（大阪府）

\*西日を浴びた放課後の光景をハチミツに喩える感性。琥珀色の瓶が映像として見えてくるのも不思議な味わい。蓋を開けた途端に、特別な時間の甘い香りが立ち上ってくるのだろう。

頭が痛いから  
頭を切り落としてぶん投げたい

式号（広島県）

\*頭を切り落としたらきっと頭痛は治る。治ってよかったと安堵している胴体が見えるようだ。シュールな味。

別れて三年  
細胞は全て入れ替わり  
君の知る私はいない

ベロニカ（神奈川県）

\*決然として、きっぱりと男前な感じ。過去の痛みや苦しみをぐずぐず引きずることはない。三年前のことなど、細胞すら私には残っていないのだから。

生きる実感を得るために  
自ら波風を立てる君

浅葱（愛知県）

\*たしかに、荒波に立ち向かっているときこそ、生きている実感がわく。ならば自ら荒波を立てて生きていけばいい。この詩を読むと、とんがって生きている人たちのことを、かわゆく思えてくる。

部活最後の片付けじゃんけん

今日だけは負けていい気がした

堀越さん（大阪府）

\*じゃんけんに負けた人が片付けをする役目。勝つと、「やったー」と嬉しかったが、部活最後の日は、じっくりと心をこめて片付けして、一分でも長く部活動が続けていたい。

雨の日はいつも右の腕だけ濡れる

笹生あい（東京都）

\*なぜ右の腕だけが濡れる？ 初め意味がわからなかったが、しばし考え、なるほど、恋人と一本の傘を差して歩くという意味だとわかった。しゃれた味わい。

ばあちゃんね

電話にわたしが出ると

とろけるような

声を出すんだよと娘

加藤 美紀（愛知県）

\*詩の中の登場人物は、ばあちゃんと孫娘。そして、詩に顔を出さないが、娘の話をうんうん聞いている母親。人と人の心の触れ合いの温かさを感じた。

からり、と涼しい音

わたしが口にしているのは

氷と、氷がとける時間

雨傘うみ（愛知県）

\*なるほどと感心した。なにかを味わうということは、それを味わっている時間を味わうということでもあるから。

生きる意味は小さじ一杯くらいが  
ちょうどよい

呉田 稔（福岡県）

\*大義よりも、等身大の生きる意味のほうがずっと長持ちする。小さじ一杯くらいの生きる意味で生きていって構わないのだよと、励まされた。

好きな人の頭蓋の形を想像する

宇井 麻千（大阪府）

\*人の頭蓋を見ることができるのはきっと、その人が亡くなったとき。エロスとタナトスの絡み合った感情。昔「骨まで愛して」という流行歌があったことを思い出した。どきっとする作風。

魔女っ子に落雁渡す

我が祖父よ

ベロニカ（神奈川県）

\*ハロウィーンの日「トリック・オア・トリート!」。落雁は高級なお菓子だ。心優しい祖父は精一杯のおもてなしをしたのだろう。西洋からきたハロウィーンと、中央アジアから中国を経由して日本に入ってきたお菓子の、イメージの落差で面白さを出した。